平成 25 年 5 月 25 日
（公財）日本セーリング連盟
レデイース委員会
委員長　吉留容子

平成 24 年度 JOC 女性スポーツフォーラム

報告書

目的：スポーツにおける指導者と選手間のコミュニケーション事例の紹介を通じて、今後の女性スポーツの発展に資することを目的に開催。
主催：公益財団法人日本オリンピック委員会
日時：平成 25 年 3 月 28 日（水）14：00～16：00
会場：味の素ナショナルトレーニングセンター大研究室
参加者：JOC 役員、女性スポーツ専門部会員、各加盟競技団体役職員、、学識経験者、スポーツ関係者メデイア関係者等
JSAF 参加者：中川千鶴子

内容
開会挨拶
公益財団法人日本オリンピック委員会専務理事　市原　則之

2003 年に専門委員会としてスタートした JOC 女性専門委員会も設置から 3 回目を迎え、今回は、日本柔道連盟のいきさつから、指導者とされる側の選手間のコミュニケーションについて取り上げアスリートファーストを目指した指導者と選手の関係性を考え、又質疑応答の際、各競技団体で抱えている女性スポーツ関連などの問題について意見交換する場として、前進する会となる事を希望致します。

事例紹介：指導者と選手間のコミュニケーションについて
財団法人日本ラグビーフットボール協会コーチングデイレクター
中竹　竜二

「スポーツに於けるフォロワーシップ」というテーマで早稲田大学ラグビー部監督時代のエピソードを交えながら、これまでの指導者像はすべてを把握し、常に正解を持ち、チームをけん引していく**リーダーシップ型**でしたが、これからの指導者は知らないことを自覚したうえで選手を巻き込め考えることで選手たちを成長させる人間像**フォロワーシップ型**

が求められているのではと述べ、選手に対し**頑張ってね！**ではなく**頑張ってるね**という言葉をかけ選手本人よりお前のことを考えているよ！ということで選手と一対一で接触することが重要、指導者は「目の前の選手が必ず成長する」と強く信じることが大切と述べ、チームにおける指導のスタンスや、選手との個人面談を意識して指導しているとのことでした。

公益財団法人日本バトミントン協会ロンドンオリンピック代表監督
朴　柱奉（パク・ジュボン）

ロンドンオリンピック日本代表監督として、バトミントン界に日本史上初の銀メタルをもたらした監督は韓国、イギリス、マレーシア、日本の 4 カ国で指導した経験から「海外の選手は積極的にコミュニケーションを取り技術を高めるが日本人選手は内向きだ本音を出さない」事があり自分自身も選手の心が読めるよう選手と一緒に汗を流し信頼感を持つよう努力をした。又女子選手に対してはメンタル面でのケア―を重視し、必要ならば女性コーチ、医師の意見も聞いて指導に努めた。

財団法人 JKA アドバイサー
財団法人日本自転車競技連盟ハイパフォーマンスアドバイザー
ロンドンオリンピック日本代表選手団アドバイサースタッフ
沖　美穂

スピードスケートから自転車競技に転身後、単身フランスに渡り、欧州各地のプロチームを渡り歩いた経験談により、

＊日本人選手は海外選手とのコミュニケーション不足
＊コミュニケーション不足が戦略不足に陥り結果的には成績を残せず
＊語学力の問題

自転車の場合には、選手同士の会話から得られる情報も多く、そのようなやり取りが増えていくことにより、競技力向上に繋がるのではないかと語り、ライバルであってもコミュニケーション取っていくことが重要であるということでした。

パネルデイスカション

女性スポーツ専門部会長
コーデイネーター山口　香

3 人の登壇者と参加者とのパネルデイスカッションが行われ、質疑応答のなかで日本陸上競技連盟の小松邦江理事より女子の現状、日本セーリング連盟中川千鶴子副会長よりレデイース委員会主催の「国体に於けるチャイルドルーム」設置に関する事や、理事会の中での女性理事の現状や経緯など女性スポーツへの取り組みについて紹介。

最後に本日の議論を参考にしながら、今後も各競技団体同士で情報を共有していくことで、女性スポーツの問題解決につなげていきたいと言うことでした。

閉会挨拶

公益財団法人日本オリンピック委員会理事・女性スポーツ専門部会長山口　香

以上